はじめに

本研究は「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題――看護職志望者の適性と大学入試――」と題する。日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）による助成を受けて実施してきた。助成期間は平成22年度から平成26年度までの5年間である。平成25年3月にそれまでの研究成果を取りまとめて中間報告書を刊行した。

本報告書は，５年間の研究成果を取りまとめた研究成果報告書である。

Ⅰ　研究目的[1]

本研究は，看護系専門職の養成が四年制大学中心へとシフトしていく中，如何にして優秀な人材を看護系大学に惹きつけていくことができるか，その方策を探ることを目的として行ってきた。まず，高校段階で理系・文系のコース分けが進む中，その双方の適性が必要となる看護系大学の入試形態が複雑な様相を呈していることを明らかにした。看護系専門職を志す高校生は進路選択の上で難しい判断を迫られ，看護系学部は入試制度の狭間で相対的に不利な立場に置かれていると考えられる。現状の教育制度の下，看護職志望の高校生が身につけるべき適性・能力はどのようなものか，さらに看護系大学ではどのような入学者募集戦略が可能なのか．看護教育学，統計学，教育接続論といった学際的なアプローチにより，具体的にその要因を解明し，看護系大学のための入試戦略モデルの構築を試みることとした。

我が国の看護専門職業人の養成は伝統的に専門学校・短大が担ってきたが，近年，急速に看護系教育機関に占める四年制大学のウェイトが大きくなり（以後，「四大化」と表現する），入学者ベースでは既に三年制の養成所に次いで２番目のシェアを占めるようになっている。直接的には平成４（1992）年制定の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の影響だが，背景には医療の高度化がある。看護専門職に求められる専門性は多岐にわたり，知的，精神的にも身体的にもタフであることが要求されるようになっている。事実上，大学入学後に全ての事柄を一から教育するのは不可能なので，看護専門職への志向性や適性を備えた人材確保が重要である。ところが，現実にはそれが難しい．それは後期中等教育　（高校）の多様化に主な原因がある。

[1] 中間報告書からの再録。

看護教育の四大化が進んだ時期は，大学進学率が飽和状態に達した時期でもある。小中学校の教育内容が削られる中，以前は大学に進学しなかった層を進学させるため，高校では理系・文系のコース分けが早期化するようになった。看護系志望者も早い段階で文系・理系のいずれを選ぶべきかの意思決定を迫られる。ところが，看護専門職は文理双方の高い資質が要求される。多くの分野では当該分野が理系，文系のいずれに属するのか，少なくとも歴史的な経緯によって明確に分かれてきた。一方，看護系大学の場合には急速な四大化によって分野としての位置づけが明確に打ち出せないまま，各個別大学の事情で入試形態が混沌としている。その結果，四年制大学看護系志望者にとってキャリア・パスが描けない状況ができている。すなわち，現状では優秀な人材を他の分野に流出させている可能性も高い。

期せずして看護専門職養成は高大接続問題の渦中に投げ込まれ，制度の狭間で苦戦せざるを得ない構図となった。意欲と資質の高い受験生を惹きつけるには，個々の大学が努力して看護の魅力を伝えようとするだけでは十分ではない。受験生が自然と看護専門職に向かえるようなキャリア・パスを作る必要がある。すなわち，他の分野を凌駕するような看護系大学特有の大学入試戦略の構築が必要となっている。

適切な大学入試戦略を構築するには大きな障壁がある。大学入試は社会的に重要な割に認知度が低いため，大学入試研究の専門家養成が進んでいない。そのため，結果的に多くの誤った信念が流布している。多くの大学では不適切な情報に踊らされ，学生募集に無用なエネルギーを注ぐ状況に陥っている。効果的な大学入試戦略の構築には，海外を含めた事例の収集だけでなく，教育制度の歴史学的分析，評価や測定に関わる統計的分析，入試場面における技術的問題の分析，選抜や学生募集活動の効果の適切な評価など，学際的な検討が必要である。中でも，当事者である受験生や高校教育の実情を把握し，意見をすくい上げることが最も重要である。それと大学側の認識，求める資質，適性，学力と実質的な制約条件をすり合わせたとき，初めて現実的な解決法を見出すことが可能となる。

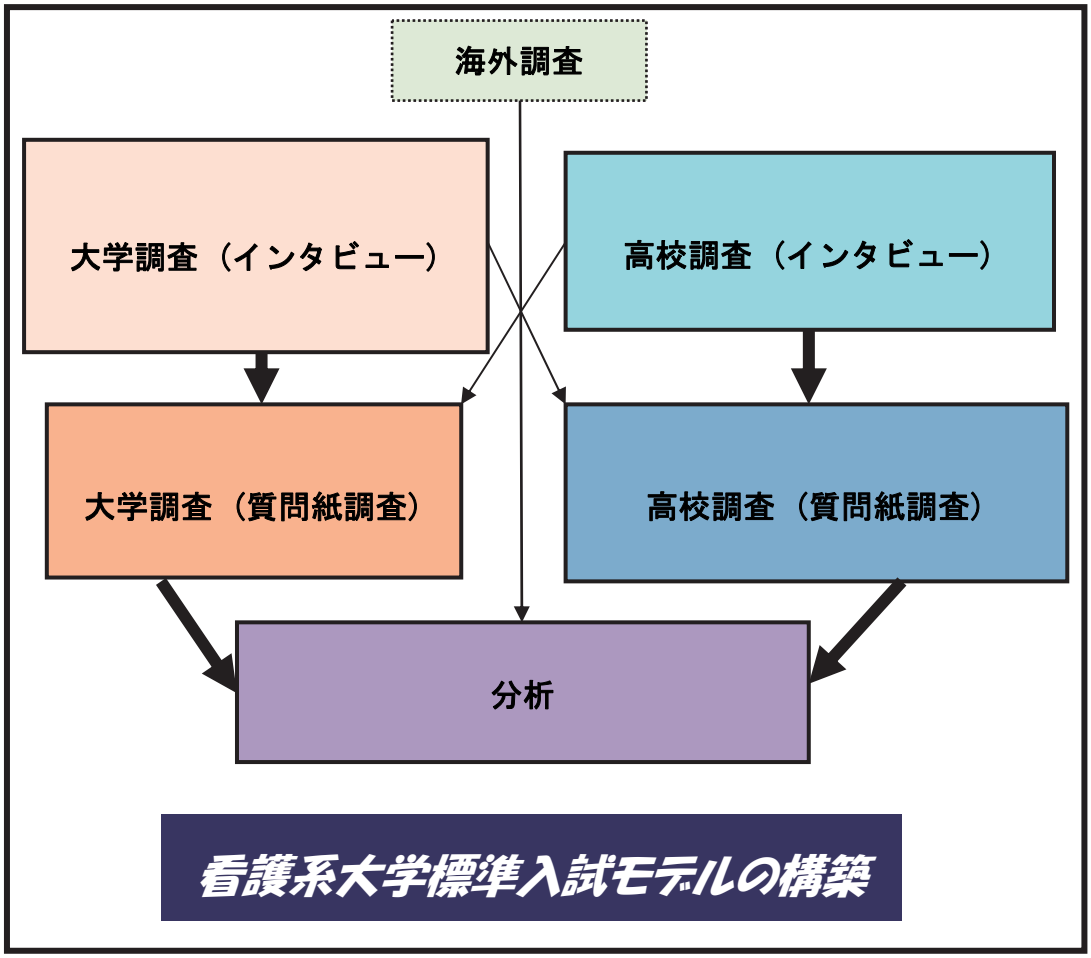
医療の高度化の中で，看護専門職に高い意欲と資質を持った人材を集めることは社会的にも急務である。本研究では，主として四年制大学を念頭に，学生がどのような進路選択を経て看護専門職を志すようになるのか，その典型的なプロセスを明らかにすることを試みる。その上で，進路決定の障壁となっている問題を析出し，現状の教育制度の限界を踏まえた上で，分野としての看護系に高い資質を持った受験生を惹きつけるための標準的

な入試モデルを見出すことを試みる。さらに，各大学の個別性を加味して個別大学として取るべき入試戦略の指針を明らかにすることを目指す。

Ⅱ　研究計画概要[2]

看護学系で学ぶ学生に求められる資質・適性・学力と志望する受験生の意思決定プロセスを見出すために，「看護系大学，および，看護系の専門学校の学生に対する調査」と「主として看護系大学を志望する高校生に対する調査」を基軸とした。文献調査や海外の事例なども参考に，設置者や大学の立地条件等の要因を加味しながら，四年制大学における看護教育の前提となる高校時代のコア・カリキュラムを見出すことを試みる。最終的に大学入試制度の枠の中で実現可能な標準入試モデルについて検討する。

研究計画の概念図は以下のとおりである。



[2] 中間報告書からの再録。

Ⅲ　研究成果報告書概要

本報告書では，研究プロジェクトとして推敲してきた研究成果について，当初の研究計画にしたがって成果を取りまとめた。第Ⅰ部が「大学調査」，第Ⅱ部が「高校調査」，第Ⅲ部が「海外調査」である。

第Ⅰ部の「大学調査」は，本研究プロジェクトにおいて2010（平成22）～2011（平成23）年度に実施した，看護系大学，および，看護学校（看護師学校養成所３年課程，看護専門学校）の学生を対象とした「質問紙調査」を中心に，関連する論考をまとめたものである。一部，既出の学術研究発表，論文，中間報告書の内容を含む。

第Ⅱ部の「高校調査」は，本研究プロジェクトにおいて2013（平成25）年度に実施した高等学校進路指導担当教員を対象とする「質問紙調査」を中心に，関連する論考をまとめたものである。一部，既出の学術研究発表，論文の内容を含む。

第Ⅲ部の「海外調査」は，台湾調査時収録した資料を日本語に翻訳したものである。なお，原語の資料は中間報告書に採録した。

研究代表者：　倉元　直樹
東北大学高度教養教育・学生支援機構　准教授